ホーヤク祭り（帝釈天祭）

はじめに

国東町の高良地区に伝わる帝釈天祭は、旧暦の６月17日の宵祭りに、帝釈天さまにお供えする供物が、小麦粉で作った男女の生殖器を形どったものから、俗にホーヤク（たわけた事）祭りとも呼ばれています。

高良は、豊崎地区にあり、右斜面の谷あいを流れる小さな高良川を挟んで、高台に家が並んでいます。この小さな集落に、天満社（現在は台風のため倒壊）・山神社・阿弥陀堂そして帝釈堂と２つの神社と２つのお堂を有し、地区民のあつい信仰を受けています。また、馬の背のような小山を越えると、六郷満山末山本寺の大嶽山神宮寺が建立されています。

私が初めて高良を訪れたのは、かれこれ30年前、国東町歴史民俗資料館に勤務して間もない頃でした。国東町の出身ではない私にとって、国東の里で受け継がれている有形・無形の文化財に驚き、興奮したことを鮮明に覚えております。まさに国東は、文化・文化財の宝庫であり、「野外博物館」と称される由縁だと思いました。

今回、ホーヤク祭りを紹介するにあたり、かつての祭りの様子を記したいと思います。ちなみに今年のホーヤク祭りは新暦の７月30日でした。

奇祭ホーヤク祭り

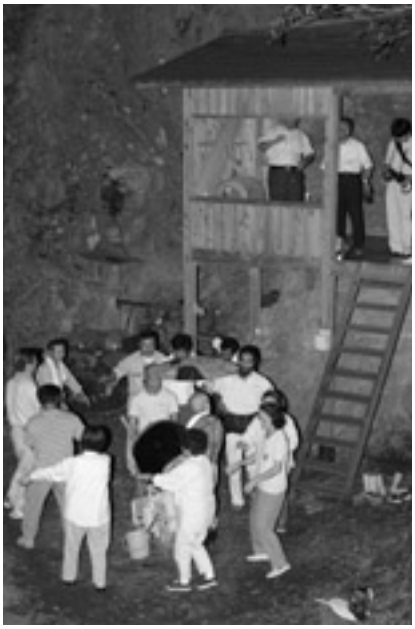
帝釈天の祭りは、旧暦の６月と11月の２回行われ、夏祭りがホーヤク祭りと呼ばれています。祭りは、五穀豊穣・無病息災・家内安全・安産祈願などの諸願をかけて、神宮寺住職が司祭者となり、執り行われ、読経のとき拍手を打って参拝します。まさに神仏習合の世界といえましょう。

祭りの準備

キモイリ（世話人・入札制で一番安く札を入れた人に落ちる）は、17日の夕方までに全戸よりその年に収穫した小麦粉２合と、神酒代として１合分のお金を集めておきます。夕方、キモイリの家に青年たちが集まり、神酒を飲み、小麦粉をこね、お供えの団子作りが始まります。供物が供物だけに、それはそれはにぎやかなこと。「お前のは大きい、小さい。」などといいながら、作りあげていく光景は、卑猥さは微塵も感じられず、和やかな雰囲気の中で、作られています。しかし、どうしたことか、作るのは男衆。女性たちは、顔を赤らめながら、できあがった供物をゆでています。

今年も男衆がお供えの団子を作りました

団子ができあがると、大太鼓を打ち鳴らし、準備ができたことを告げます。人々は、昼なお暗い原生林の山道を、帝釈堂めざして、2キロメートルほど登っていきます。



帝釈堂での盆踊りのようす（平成15年7月）

祭祀

帝釈堂は頂上にあり、大きな岩窟の下に建立されています。いわゆる六郷満山の寺々で多く見られる懸屋（岩窟から屋根を伸ばし、背面を岩壁にした建物）のお堂です。拝殿は、高さ３メートルほどの梯子を上ったところにあり、岩穴を須弥壇として、武帝を思わせる帝釈天像と仁門菩薩像の石造仏が安置されています。

供え物は、特大型の一組の団子で、永代堂主とキモイリによって奉納されます。かつて、帝釈天像は、巌の中に安置されていたといわれますが、祈願成就のお礼に今のお堂が寄進されたといいます。

型どおりの儀式が終わると、堂横のツボ（庭）で盆踊りが奉納されます。原生林に響く左衛門や六調子の口説き唄は、一種独特の雰囲気です。ナカヨカイに男衆には男のものの、女衆には女のものの団子が配られます。夜遅くまで帝釈天さまの森は、和やかなときが流れていきます。

ホーヤク祭りの起源は、定かではありません。「高地ン、高良の子産堂。犬が鳴ったら、戸が吠えた…」等々と、お供えの団子を見て、ホーヤク（たわけ）事の祭りとして、冷やかし唄が残っていますが、豊かな実りを祈願するために、その象徴として男女の生殖器を団子に託して奉納したと思われます。かつては、粟や稗の団子を供えていたことからも原始信仰と原始農耕を色濃く残した焼畑農業の要素を持つ、きわめて貴重な祭りといえます。

おわりに

村の小祭りが消えると「村が消える」。祭りは、その村の誇りであり、地域の連帯感を生み出す源だと思います。高良のホーヤク祭りが受け継がれる限り、高良の未来に向けて、地区民の誰かが動き出すはず。ホーヤク祭りは、市の無形民俗文化財に指定されています。文化財保護法の中で、政府や地方公共団体の任務が明確にされています。同時に所有者や代表者にも心構えを訓示しています。

なによりも自分たちの地域にある文化財は自分たちで守り継承していこうとする理念が必要となります。行政は、受け継いでいる人々の声を聞き、文化財の保存と活用に最大限の努力をすることが、今、求められているのではないでしょうか。

（前国東市教育委員　金田信子）